

京三中三七会 半田への旅

三中三十七回生一同

平成十五年十二月七日の例会で、「みんなで六十年ぶりにもう一度半田へ行こう」という呼びかけが遂に実現した。

前回の昭和四十五年十一月以来の一泊旅行であり、夏の大阪三七会に代えての行事とした。

参加者三十六（別に同伴四） 不参加者八十八 未着二十二
計百四十六

不参加者の大半は健康上であり、殆どの方から行けなくて残念、皆によろしくとあった。

七月三日 北海道・東京・名古屋・京都・大阪・・・と各地から正午にＪＲ半田駅に集合した。昭和十九年七月五日、京都駅を発ち、午後四時に乙川駅に着き、初めて半田の地を踏んでから実に六十年の歳月が経ったのである。

すぐバスとタクシーに分乗し雁宿公園に向かう。半田市長の榊原氏、元半田高女の方々、朝日・中日の記者、その他地元

人達が迎えて下さった。

まず、昭和十九年十二月七日の東南海地震で殉難した学徒九十六名の「遺徳顕彰記念像」に一人一人が菊の花を献じてその霊を慰めた。つづいて市長の心温まる御挨拶の後、関矢の音頭で、京三中校歌を天にとどけよとばかり声たからかに斉唱した。この後記念写真を撮る。次ぎに、すぐ傍らにある平成七年七月建立された「戦争犠牲者追悼平和祈念碑」に三七名を代表して一色が献花。記念像・祈念碑の両方に学徒十三名の名前がしっかりと刻まれていた。その名前を一字一字撫でている友がいた。

この日 早朝から公園に来て献花の用意をして下さり、花まで手配して頂いた元半田高女の方々に心からお礼を申し上げたい。

山方工場跡の一部は現在半田市役所となり、その向かい（B6組立工場跡と思われる？）に半田勤労福祉会館があり、そこで昼食をとる。一色から同期生の近況報告と午後のコースと訪問先について説明があり、元半田高女の片山さん・細見さん・難本さん・山本さん・竹内さんの五名の方が紹介された。細見さんが長尾伴七先生の「昭和難学徒紅燃碑」という漢詩をよどみなく暗唱されるのを聴いて一同感激。『痛恨』の思いで、あらためて十三名を偲ぶ。

昼食後、バスの窓から山方工場の跡を探り、阿久比川に架かる江川橋を渡り、途中我々が通い渡った橋は今はないが、車窓より推測しながら本工場跡（現輸送機工業株式会社）に着く。

土曜日とて休日だが以前下見に来た一色・宮谷・三宅の頼みで特別見学を許され、工場内を廻ることが出来た。みんな六十年前の本工場の面影を何処かに求めようとする。会社の担当の方も当時の事情を知っている人はなく、多分この棟だけが残っているのでは（？）と教えて頂いたのは旧山方工場に最寄りの一棟だけだった。広い工場の半分はゴルフ場になっていた。二十年前に一年下の三八回生が訪れた際に植えた北山杉の記念樹の前で写真を撮る。日差しが強く撮影の間汗だくになった。

工場を出、阿久比川に沿って北上し、やがてバスは緩やかな丘陵の坂道を上がり、新池寮跡へと走る。かつて見た田舎の道は舗装した広い道路になっている。どこを見ても田畑はなく、住宅が建ち並んでいる。空腹に耐え、みんなで軍歌を歌った励まし合って歩いたあの懐かしい道の面影はなかった。

新池寮に隣接して一草寮があつたが、現在は一ノ草病院になっている。山口院長はじめ事務局の杉本さん、新池寮看護婦さんだった倉谷さん、苗代寮看護婦さんだった小栗さん達が出迎えて下さった。病院の二階で小休止。冷たいお茶を頂き、汗だくでくたくたの体がいっぺんにリフレッシュした。

前回の写真を見ると、あちこち野花の咲く草地であったが、今では住宅が密集していて、寮の跡とおぼしきものは何一つない。

脚に自信のある者を募ると大半が応じ、小栗さんの案内で旧若宮工場跡へと向かった。新池寮の正門はこのあたりと教えられ、何とか昔の風情の残る旧道を若宮神社まで歩いた。皆感慨深げに思い出に浸っているようだった。神社の繁る大木に迎えられ、神殿で手を合わす級友たちは何を祈ったであろうか。昔は「武運長久」を祈ったものだが。

そこから旧道と平行する新道をバスはあつという間に乙川駅に着いた。六十年前を全く思い出せない駅に変わっていたが、毎日くぐったガードだけは昔のままだった。

半田の衣ヶ浦湾はどんどん埋め立てられ、対岸の碧南市へ海底トンネルが出来る一大工業地帯となっている。川崎製鉄・日本ガイシ・台糖ファイザー等の大工場の間を走る臨海道路を下する。

予定が一時間ほど遅れたので半島突端の師崎廻りを変更し、河和から内海へ直行した。五時に大東旅館に着く。若い女将さんと二人のお姉さんとお母さんが笑顔で迎えて下さった。みんな美しい人である。全館貸し切りで、まず温泉で汗を流す。全部屋伊勢湾が一望でき、遠く伊勢がかすみ左手は志摩であろう。

六時から柄本の司会進行で懇親会が始まる。幹事を代表して二宮が「予想を上回る四十名もの参加者があり、地元の方々の温かい御高配に感謝します。同じ釜の飯を喰った我々の強い絆と連帯感でこれからの人生を大切にして生きて行こう」と呼び掛けた。次いで春の下見の時から何かと協力下さり、わざわざ内海までご同行頂いた小栗さん・倉谷さん・杉本さんからご挨拶があった。今度の旅の記念にと常滑焼きの急須を小栗さん・倉谷さん・杉本さんから皆に贈られ一同恐縮した。また亀崎にお住まいの間瀬時江（八十歳）さんの戦争中の半田の生活や空襲・地震の悲惨さを描いた絵手紙を沢山見せて下さった。

岩佐の乾杯の音頭で宴が始まった。ふんだんの海の幸に大いに飲み、語り、宴は酣となる。木下が自作の「十五歳」を朗読し、弓倉はアメリカでの手術の体験を語る。藤田が「半田製作所所歌」を独唱、宮田が予科練にまつわる話をし、卒業以来初めて顔を見せた松浦が長年にわたる心のわだかまりを語った。この後全員で「ああ、紅の血は燃ゆる」と「誰か故郷を思わざる」を斉唱した。閉会後それぞれの部屋に戻ったが、前の浜での若者達の騒音も意に介せず、語り明かした事だろう。

翌日朝食後、十二月五日にまた会うことを約し、自由解散。大半は旅館のバスと若女将自ら運転する車でJR半田駅まで送ってもらった。



校歌を歌う 37 回生たち

田の皆々様のご厚情に深く感謝する旅であった。

駅では早くから杉本さんが待っておられ、我々の「半田への旅」を報じる朝日と中日の朝刊を皆に配られた。特別用意して下さったのは中日マキノ新聞店様・朝日新聞サービスマンカー武豊店様で、車中にてと亀崎饅頭の差し入れまでして頂き、半